

SHUNKEN 2004-07 32-02



駿建

2004年夏期号 Vol.32 No.2 日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

世界は君を待っている

海外で活躍する卒業生たち

基準の違う国の中で

坂本知美

私が渡独したのは、今から7年前のことになります。当時、短大の建築コースを卒業し1カ月後には、ドイツに渡っていたことを思い出します。周囲の方々の多大な応援と協力のもと、すぐにこちらでドイツ語を学び始めることができたのです。当初は2年程度の語学留学を考えていましたが、そのうち、こちらの大学でまた建築の勉強をしたいと思いました。卒業できるできないは全く考えず、建築を学びたい一心で、その時々、表面的に量をこなすのではなく、目下の興味と課題に打ち込み、じっくりとできる範囲で物事を進めてきたつもりです。先のことを考えすぎると今やっていることが疎かになりがちです。それに先への考えがその通りになるとは限りません。実際、私も7年ここにいることになるとは思いませんでした。

機会があれば、誰でも一度、国外に出ることは、大変価値ある経験になると思います。短い国外旅行でさえ、少し自分に変化をもたらすでしょう。常識が他国では非常識になったり、正しいと思っていたことに疑惑がかかったり。固まりきったと思っていた観念も、溶け始めると思います。それは、自然環境に対して、歴史、文化、国民性に対してであったりとさまざまです。

いつか、ロシアでは鉄道の遅れを咎める人がいないと聞きました。なぜなら時刻表がなく、電車の遅れようがないと。今は、そんなことはないのかもしれませんが、この例をとっても、国民性が表れています。そのいつ来

るのかわからない電車を、例えば落ち着けずに何度も時計を見ては行き来して待つか、それとも、本を読んだり、周囲の人との会話を通して有意義な時間を過ごしながらか待つか。それぞれの状況に順応できることが大切で、そういった意味でも海外での経験は、私たちの直面していることに対して選択肢を増やしてくれるものと思います。

私の今いるヨーロッパは陸続きということもあり、多くの国への移動が容易で、またさまざまな国の人が入り交じっているのも、他文化を知るのにも絶好の場所です。建築に関しても、その国々の国民性が表れていて大変興味深いものです。異国の文化や人に出会うことにより、自然に自国についても語ります。その際、自国への興味と認識度も高まっていきます。一般的なことに留まらず、学業面においても学び取ることがたくさんあります。

私は今、ヴィースバーデンという街の専門単科大学で卒業設計に挑んでいます。設計テーマは、文化財指定されている古い給水塔と周囲の建物を保護し、新築を併設させ融合を図るもので、機能的には水にまつわる美術館ですが、こういったヨーロッパでは多い、古と新の共存も個人的に興味深いものの一つと思っています。今年3月には、大学で日本の伝統的な和紙、千代紙を紹介しつつ、木枠を接着剤なしに糸で縫って組み立てた自然素材の自作照明に挑戦し発表しました。私たち同様、こちらの人たちも異文化に興味をもっています。相互の交換があってこそ国際社会だと思っています。

(さかもとともみ)

略歴

1997年 日本大学短期大学部建設学科建築コース卒業
1999年～ ヴィースバーデン専門単科大学建築学科



私の住んでいる街の建物



古い建物が新しい建築と一体になっている所



昔、実習していた時に作った模型と



2+1=3層ガラス断面



住宅施工現場



1800年代の住宅

-20℃からの発想

金井田晃央

森と湖、限りなく続く空と大地、そして白夜の夏と暗闇の冬、それがスウェーデンです。冬は-20℃にもなりますが、生活の中でこの寒さが厳しいと思ったことはありません。冬に外を散歩するのもごく一般的なことです。それは決して私が寒さに強いからでなく、寒い中でも住宅の中は暖かく安心できる居場所をもっているからだと思います。

スウェーデン住宅の特徴は住環境です。-20℃にもなる気候において、住宅はいかに快適な住環境を省エネルギー・低環境負荷で実現するかが最大のテーマともいえます。すでにスウェーデンでは1973年のオイルショック以後、建築基準法の大改正が行われ現行とほとんど変わらない高断熱・高气密基準が確立されました。1980年に気密・換気に関する基準が付加され、現在は1990年の年間トータルエネルギー消費量を規定以下に抑えるという基準に基づいています。

一般木造住宅の断熱はロックウールで壁215・床170・天井400mmあります。窓は2+1=3層ガラスが主流になりつつ、これは単層と複層ガラスを組み合わせたもので、その間にブラインドが入ります。高い断熱性と共に夏はブラインドで遮った日射熱を自然対流で外部へ放出します。外壁の断熱・気密処理は工場で行われ、窓・ドアも取り付けられた壁ブロックが作られます。現場ではこれらをクレーンで組み立てます。1週間程度で主要構造と断熱・気密処理を完了します。この時点で屋内の換気システムを始動させます。

十分な断熱・気密性能をもった境界構造は、最小限のエネルギーで屋内空間すべて年間を通して快適温度に保ちます。これは暖房だけでなく冷房にもいえることです。特に壁内結露を起こさないように気密層や防水透湿層の位置は細かく指示されています。これと同時に重要なのが屋内の換気です。規定された最低給排気量に従い、各部屋の風量は風量計を用いて調整されます。現在は熱交換率80～90%の換気システムに冷暖房を組み込んだタ

イプが普及しつつあります。これには高性能フィルターが取り付けられ、塵・埃・煤煙・花粉などを取り除き、健全な空気環境を保ちます。

スウェーデン住宅の耐久性は100～200年ともいわれます。もちろんその間にリフォームが行われますが、古い住宅のリフォームでは、外装・内装だけでなく、構造補強や断熱・気密・計画換気の付加を行います。これにより、新築と同等の品質（住環境）となります。そして当然のごとくこのような中古住宅は新築と同価格、もしくは高価格で売買されます。住宅は社会資産として認められているのです。1800年代の住宅も珍しくありません。

日本はすばらしい建築技術をもっていながら、未だ一般レベルの住環境は遅れていると感じます。この快適な住環境は-20℃からの発想ですが、現在の日本住宅にとってもこれらのコンセプト・技術は導入されるべき点が多くあると思います。そして近い将来、日本のすべての住宅がスウェーデンレベルの住環境を有し、生活の活力となるような安心できる居場所であってほしいと思います。

(かないだあきお)

略歴

2000年 日本大学大学院理工学研究所建築学専攻修了
2000年～ SWENI intertrade AB
現在 スウェーデン住宅・建材輸出会社（Sweden/Uppsala）技術・輸出部所属

アンコール・ワット遺跡の修復

三輪 悟

●カンボジアの魅力

1997年10月21日、初めてカンボジアの地に降り立った。当時、建築史建築論研究室（片桐研究室）大学院1年だった私は、2カ月間をアンコール遺跡群のあるシェムリアップの町で過ごした。

当時ボルボト派の戦闘が続いており、遺跡や町の市場にはAK銃を担いだ兵士がどこにでもいて気味が悪かった。兵隊を乗せたトラックが北部戦場より戻り、アンコール・ワットの前を通過する際、拳を空に奇声をあげる姿

に「凄い所に来た」と感じた。

町中には物乞いがいたが、インドやエジプトで見たそれとは違う淡白さがあつた。決して裕福といえない暮らしの中に、人々の素朴さと人懐っこさがあり、より大きな心の豊かさを感じた。自然と共に生きる人々の暮らしぶりは、東京から来た私の目には何より新鮮に映つた。

● アンコール遺跡群と国際協力

世界遺産アンコール遺跡群は、アンコール・ワットをはじめ主要なものだけで60を超える石造建造物群である。町から遺跡へは一本道を北へ進むが、道の両側に並ぶ巨大な木立にまず圧倒される。遺跡周囲には大木が多く、森の中に住民の暮らしがある。「人と遺跡と自然」3者の共生は、アンコール遺跡群の最も大きな特徴といえる。

現在、ここでは多くの国々が国際協力の枠組みで遺跡の調査研究・保存修復に尽力している。旧宗主国のフランスはじめ、日本、インド、中国、ドイツ、イタリア、スイス、アメリカから来たチームがアンコール地域という限られたエリアで活動している。これらの活動により現地には数百人の雇用が創出されていることから、その活動の規模がわかる。日本からはアンコール遺跡国際調査団(筆者は、団内部に片桐正夫教授が組織するアンコール・ワット修復委員会に所属)、JSA(日本国政府チーム)、奈良文化財研究所、東京文化財研究所が参画している。筆者は1999年5月より現地に住み、専らアンコール・ワット西参道の修復プロジェクトに関わる。



池越しに見るアンコール・ワット



石を加工する道具は日本製



石の据え付け

● カンボジアから改めて日本を振り返る

人口数万人というシェムリアップの町は小さな田舎町だ。町の中心部を外れるとバッテリーやランプでの暮らしが主流となる。村では米を作り、家畜を飼い、早寝早起きする暮らしである。10人兄弟も珍しくなく、3世代が共に暮らすのが普通である。すべてが、自然の中に位置づけられた一連の流れであると感じる。熱帯の気候風土に拠るのか、素朴な国民性をもつカンボジア人である。不幸な内戦時代を経て立ち直りつつあるカンボジアであるが、今だ学校教育は十分とはいえず、汚職の体質が社会規範になっているのも一つの現状である。昨今、町と村の2極化は激しく、村の都会化が進みつつある。治安の回復と共に観光客の増加は著しく今年は100万人がカンボジアを訪れると見込まれている。

カンボジアに住む前、東京の下町に20年余り暮らしたが、ある種できあがった社会システムの中にいたことに気がつかないでいた。カンボジア人の暮らしを見てみると、生物としての人間に立ち返り、今後を考え、学ぶ機会も多い。

SARS、鳥インフルエンザと立て続けに奇異な病気が世間を騒がせた。これらは人間が自然を懐柔することへの自然界からの警鐘のように感じてならない。今日本で社会問題となっている少年犯罪も根は同じではないだろうか。

自然と共に生きるカンボジア人の暮らしを尊重しつつ、そこから学び、カンボジア人が将来に夢をもてるような仕組みを作る、これが我々の役割ではないかと考えている。(みわさとる)

略歴

- 1997年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 1997年 アンコール遺跡国際調査団参加、カンボジア初渡航
- 1999年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了
- 1999年～ アンコール・ワット西参道修復工事担当

ロンドンで建築を設計する

山中 明

ロンドンに来てから、もうすぐ10年になります。最初の2年間、こちらの学校で勉強し、卒業した後、ロンドンで建築家をしています。

現在までに4つの設計事務所で働いています。日本と違ってイギリスでは、特に若いうちには、会社を移りながらキャリアを積んでいくというケースが多いようです。同時期に卒業した友人や同僚たちも、だいたい同じくらい会社を移ってきています。

今働いている設計事務所はハワース・トムブキンスと

いう、所員数は20人、劇場の改修と集合住宅で実績をあげてきている若手の事務所です(www.haworthtompkins.com)。

私は昨年夏から、イングランドとアイルランドの間に浮かぶマン島の首都、ダグラスという町に、60戸ほどの集合住宅の設計を担当していました。敷地は弧を描く海辺のメインストリート沿いにあり、ヴィクトリア朝時代の建築が建ち並び、景観保存地区に指定されているエリアです。イギリスにはプランニングと呼ばれる、建築の外観などに対する規制があり、審査を通らないと建築を建てることはできません。日本の建築基準法とは違って、建築のヴォリュームだけではなく、意匠も問題にされます。このプロジェクトを設計する上で焦点となったことのひとつは、いかにヴィクトリア朝の分節された立面のリズムに現代建築のファサードをはめ込むかということでした。2カ月前にこのプロジェクトをマン島政府に提出して、建設の許可を待っているところです。

今はロンドンの文化施設の集まるサウス・バンクという地域にある会議場と保育施設を含むコミュニティセンターの計画に関わっています。6人のチームで、建設のためのディテールのデザインの追い込みに入っています。

外国で建築設計の仕事をするには、根本的な難しさが内在しています。さまざまな物事に対する理解の相違に驚かされてしまうことも多いわけです。やはり、自分の国で、さらに一部の地域に密着しながら、人々の活動や風土・習慣に対する深い理解に基づいてデザインすることが理想的なようにも思われます。

しかし、先日のEU拡大に象徴されるように、ロンドンをはじめとするヨーロッパの主要都市では、これまでの地域主義、国家主義的な枠組みを超えるような動きがさまざまな形で現れてきています。ロンドンで暮らすことの面白さの一つは、そのコスモポリタンな文化に身を置くことにあると思います。この点において、ロンドンはグローバル化の進む今の世界における先進的な実験場のひとつであるといえるでしょう。世界中からさまざまな理由で集まってきた人たちが、なんとかコミュニケーションを取りながら生活しているわけです。このことが現在のロンドンの多文化的な活気の原動力になっていると思います。

そして、ここで建築設計の仕事をするこの魅力は、建築という共通の言語を通して、全く違ったバックグラウンドをもった人々が、その違いをもち寄ってデザインするプロセスに関わることができることです。前向きに未来をつくろうとするこの職能を通して新しい生活の舞台の建設に寄与できることは、エキサイティングなことだと思います。

(やまなかあきら)



マン島の集合住宅



スタンフォード・ストリートのコミュニティセンター



デザインチーム

略歴

1994年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修了

1994年 国際メディア研究財団勤務

1997年 Architectural Association School of Architecture 修了

ビル・ダンスター・アーキテツツなどを経て、現在、ハワース・トムプキンス勤務

相対化する思考

菅原大輔

現在の事務所に在籍して、はや2カ月が経とうとしている。初めての仕事が設計競技だったからなのか、すべての場面が早朝に思いかえす夢のごとく、記憶の断片としてしか残っていない。異国の地にいることすら実感できず、この文章を覚めない夢の中で書いているような感覚にさえ襲われる。

『異国で働くこと』を一般化して語るには、あまりにも不適切なこの状況にあえて開き直り、記憶の断片をつなぎ合わせて私的状況を淡々と語ってみようと思う。それが現在の自分にできる唯一の伝達手段であり、『現実感に欠ける』心境の『現実』を直接的に伝えられる唯一の方法であると考えからだ。

今の自分が夢ではないことを確かめるように、異国での経験を考えるようになった『少し前の記憶』から辿ってみたいと思う。

僕は二つの大学で建築教育を受けている。このことが『異国のこと』を考える最初の、かつ最大の動機となっている。

大学院に入学した頃は、新しく触れる建築理念や教育方針に驚き、戸惑いすら感じていた。時期を同じくして多くの他大学生との建築議論の機会を得たので、そこでも多くの建築的思考に触れることができた。それ以来、自分の思考に深く浸み込んでいた（日本大学での）建築教育を意識するようになったと同時に、二大学での建築教育を軸として、『日本』の中での自分の（建築的）立ち位置を客観的に考えるようになった。

自分の立ち位置を客観的に考えるようになっただけで、実際にそれを明確に認識し、自分の建築的思考をそれに基づいて決定できているわけではない。しかし、さまざまな「もの・こと」を思考し、設計していくとき、それは自分の中で大きな心境の変化であったことは確かである。

二つの大学教育によって『日本』の中での立ち位置を意識するようになった自分が、『異国』と比べてときに見えてくるであろう『世界の中の日本』に意識が向くようになったのは非常に自然な流れだった気がする。それから常に『異国のこと』を考えるようになった。

就職活動をしたのは大学院卒業の後である。建築雑誌で知った現在の事務所に電子メールと電話でコンタクトを取り、ポートフォリオを片手に巴里に渡った。

『異国』で働くことが自動的に現在の事務所で働くことに直接結びつくわけではないだろう。ではなぜ『異国』の中で仏蘭西を選び、仏蘭西の中で現在の事務所を選んだのか。それは自分の中でも明確に整理できていないのかもしれない。しかし、一つだけいえることは現在の事務所が、自分が興味をもち続けてきた『部分的操作』を自分とは対極の形態で行っているということである。部分的操作によって空間全体が変質していくことに個人的に非常に興味をもっている。僕はそれを直線的な形態とそこに存在する建築的要素の『ズレ』によって獲得しよ

うとする。しかし、現在の事務所は自由曲線によって変質する空間を獲得しようとしている。それはポンピドーセンター内に存在する『床面』という要素を拡張することによって獲得された「pompidou restaurant」や、直方体の空間に緩やかな傾きのポリウムを挿入することで獲得される「librarie florence loewy」の空間性に見出すことができるであろう。同様の思想をもちながらも対極の空間を生み出す状況に身を委ねてみたかったのが現在の事務所を選んだ理由である。

今思い返すと『異国で働くこと』を含め『二つの大学で教育を受けること』、『現在の事務所を選んだこと』、すべては自分を相対化して、客観的に見ることにつながっている。『異国で働くこと』はつまり自分を見つめることであるのかもしれない。

この文章を書きながら自分が『異国にいること』と『その意味』を再認識することができた。それは『覚めやらぬ夢の終わり』を意味し、現在の状況を現実と捉えつつ、すべては『終わりのない自分探し』であることに気づく。（すがわらだいすけ）

略歴

- 2000年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 2003年 早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修了
- 2003年 atelier+.sugawara_daisuke 設立（現在も活動中）
- 2004年～ JAKOB+MACFARLANE

pompidou restaurant



librarie florence loewy



筆者が在籍する事務所 JAKOB + MACFARLANE (仏) の風景

新任非常勤講師紹介

芦原太郎 先生 (設計演習Ⅰ, Ⅱ)

略歴

- 1974年 東京芸術大学美術学部
建築科卒業
- 1976年 東京大学大学院建築学
修士課程修了
- 1977～85年
芦原建築設計研究所
- 1985年 芦原太郎建築事務所設立



建築は普通フィジカルな構築物と考えられがちで、建築の歴史もそれぞれの様式のスタイルについて多くが語られてきました。しかし、私にとっての建築をつくる行為は、形やスタイルを生み出すというよりは建築における新しい関係を模索することといえます。建築とは、関係性を創造的に構築することなのです。建築家とは、社会や人々との関係を創造的に調停する者で、その結果が建築として構築されるのだと思います。

(あしはらたろう)

宇賀神 弦 先生 (新)デザイン基礎, (新)建築設計Ⅰ)

略歴

- 1986年 日本大学理工学部
建築学科卒業
- 1986年～ 久米建築事務所
(現久米設計)
- 現在 同設計部主管



いずれ皆さんは各々の現場で否応無しに、自己表現を通じて各々が交わっていくことを無意識のうちに迫られることと思います。自己表現、想いをめぐらせ、夢を抱き、調べる。かたちにする。具体的なものを描き表現する。どんな場面でも、これらを強く主張していくことが求められることと思います。自分がこうありたい、こうしたい。こんな暮らしがしたい。という最初の気持ちを大切に学生時代の設計を楽しんでほしいと思います。

(うがじんゆづる)

アストリッド クライン 先生 (建築設計Ⅲ, 設計演習Ⅰ)

略歴

- 1986年 エコール・ド・アール・デコ
ラティーフ卒業 インテリ
アデザイン
- 1988年 ロイヤル・カレッジ・オブ・
アート修了 建築
- 1988年 伊東豊雄建築設計事務所
クライン・ダイサム・アー
キテクツ設立



新しいプロジェクトに取り組むということは、新たな場所、素材、技術、人に巡り会う絶好の機会であり、冒険です。それは、人生を振り返る時にこれまで関わったプロジェクトに費やした時間や労力が世の中の進歩や進化に貢献できたか、また自分の中にたくさんの良い思い出を残すことができたかといったことを実感するための自分自身へのチャレンジなのです。プロジェクトの企画から竣工までの道のりは長く、時には1年半から2年、それ以上かかることもあります。それでも楽しむのです。ちょっとしたユーモアやひねりを効かせながらクライアントと楽しくやっていくことはとても大事—なぜなら、良い時間を過ごしたいという気持ちはみんな同じだから(笑)。

(Astrid Klein)

小宮 功 先生

((新)建築設計Ⅱ,Ⅲ, (新)設計演習Ⅰ)



戸越 AP



略歴

- 1982年 武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業
伊東豊雄建築設計事務所
- 1988年 小宮功建築設計事務所設立

事務所を設立して16年、設計の仕事は楽しいです。それはモノを作ることにひたむきな人々と協働できるからです。設計課題の指導に関わらせていただいて10年、学生と建築を学ぶ時間を共にするのも楽しいものです。それは設計の課題にひたむきに取り組む学生に出会えるからです。誰でも好きなものに対してはひたむきになります。これから出会う学生諸君に建築の設計を好きになってもらうことこそ講師の大事な仕事だと思っています。

(こみやいさお)

佐藤 文 先生

((新)建築設計Ⅰ,Ⅱ)



用賀の家



略歴

- 1984年 日本大学理工学部建築学科卒業
早川邦彦建築研究室、芦原建築設計研究所を経て
- 1990年 K+S アーキテツツ設立

私は日本大学を卒業し、現在は建築設計の仕事をしています。実務では(建築)という捕え所のないものと日々格闘しています。建築設計というのはスタートは極めて個人的なものです、建築が都市の中に出現すると一挙に社会性を帯びることになります。ですからなるべく大きなビジョンで物事を捕えるように心掛けています。学生の皆さんは無限大の可能性を秘めているわけですから、出会いを大切に有意義な時間を共有しましょう。

(さとうあや)

塩田能也 先生

((新)建築設計Ⅱ, (新)設計演習Ⅰ, 建築設計Ⅲ)



一橋大学イノベーション研究センター



略歴

- 1979年 法政大学工学部卒業
- 1979～90年 谷口建築設計研究所
- 1991年 インターデザインアソシエイツ設立

建築の設計に限らず何でもそうだと思いますが、誰かが何かを教えてくれるのかというと、きっと誰も何も教えてくれません。ただ自分で学ぼうとすると、いろいろな人たちから何かを教わっていることに気がつきます。それは自分を突き詰めていって自分のもってる潜在的な可能性を自分で引っぱり出すということなんだと思うのですが、そうすると俄然設計がおもしろくなってきます。そんな時間を少しでも共有できればと思います。

(しおだよしなり)

平館勝紘 先生

(鑑定評価理論Ⅰ,Ⅱ)

略歴

- 1945年 中央大学卒業
- 1945年～ 日本不動産研究所
- 現在 同システム評価部長



私は、固定資産税評価・相続税評価などの公的評価関連の仕事の傍ら、それら関連の委員会の委員を務め、地方公共団体などに講演、教鞭を執っています。「不動産は土地と人間との関係の体现者である」といわれ、不動産の鑑定評価・不動産鑑定士などが「不動産のあり方」「社会全体のあり方」「人間の状態と行動」に大きな影響を及ぼす以上、専門外の一般教養を兼備し、建築学・統計学・財政学・社会学その他の基礎的学問に関する知識が有機的に総合一体化した高度の一般的常識を具備することが必要です。

(たいらだてかつひろ)

田島夏樹 先生

((新)デザイン基礎, (新)建築設計 I)



せんだいメディア
アテック設計競
技応募案



略歴

1983年 日本大学理工学部建築学科卒業
1983～88年 伊藤喜三郎建築研究所
1992年 A. A. SCHOOL (Architectural Association
School of Architecture) 卒業
2000年 構想建築設計研究所設立

建築は個人の発想に始まり、そのイメージーションを多くの人と共有しながら作り上げていく物です。でき上がるとそこを訪れる人の脳裏に刻まれ、元の発想が断片的に伝わります。独り善がりの発想も困りますし、主張のないモノも何を造っているのかわからなくなってしまいます。

学生時代には課題やカリキュラムの枠組みを越えた広く遠い視点で物事を捉え、柔軟で力強い発想を育てられるよう充実した日々を過ごしてください。私たち非常勤講師は、そのための実社会への窓口でもあると考えています。
(たじまなつき)

手塚義明 先生

((新)デザイン基礎, (新)建築設計 I)

略歴

1988年 明治大学大学院
工学研究科修了
1988～96年 伊東豊雄建築設計事務所
1997年 ケイティアーキテクチャー
一級建築士事務所設立



大学を卒業してもう20年近くになります。しかし見方は当時と変わっても、好きな建築、建築家は学生の頃からあまり変化がないことに自分のことながら驚かされます。建築設計の楽しさのひとつは、さまざまな問題を考察した上で、最後にはかたちをつくることによって一気にそれらに回答を出すことの醍醐味にあるかと思えます。当然そこでは広範な知識が求められます。ですから授業で多くの知識を身に付けるのはもちろんのこと、学生時代にこそ、自ら積極的に好きな建築あるいは建築家を見出し、その具体的なものの中からも多くを学んでほしいと思います。
(てづかよしあき)

藤井和義 先生

(不動産企画及び演習Ⅱ, 企画設計製図)



シティーコート目黒



略歴

1972年 日本大学理工学部建築学科卒業
1972～87年 市浦都市開発建築コンサルタンツ
1988年 アークポイント設立

当社は都市計画・ユニバーサルデザインのまちづくり・公団住宅の配置計画から建物実施設計まで集合住宅を中心に計画・設計活動を行っております。個人的には自宅がある「地域のまちづくりを考える会」に所属し、地域の歴史や環境資源の発掘を通して人々との交流を図り、新しい時代に向けたまちづくりを模索しております。キーワードはコミュニティと市民参加で、市民の視点に立った都市計画・まちづくりを考える必要を感じます。
(ふじいかずよし)

宮里直也 先生

(建築構造実験)

略歴

1998年 日本大学理工学部
建築学科卒業
2003年 日本大学大学院理工学
研究科博士後期課程修了
2003年 日本大学理工学部副手
2004年 構造計画プラス・ワン



昨年度1年間は、副手として構造系の実験や授業などを通じて皆さんと接してきましたが、今年度からは非常勤講師として構造実験を担当することになりました。現在は、設計事務所にて主に住宅などの構造設計業務を行っています。構造の楽しさを日々、再発見、再認識しています。大学に来る機会は少なくなりますが、皆さんと私自身にとって充実した有意義な時間が過ごせるよう、楽しく頑張りたいと思います。よろしくお願ひします。
(みやさとなおや)

村松基安 先生

((新)建築設計Ⅱ,Ⅲ, (新)設計演習Ⅰ)



介護老人保健施設けんゆう苑



略歴

1982年 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻
博士前期課程修了
1982～84年 清水建設
1984～93年 谷口建築設計研究所
1993年 村松デザイン事務所設立

これから建築をつくる人すべてにおいて、豊かな社会を築くために物事を深く考え、時間をかけて美しいものをつくる効率が悪く、しかし重要な仕事を正しく理解し身に付けることが必要と考えます。さらに建築を設計する行為には抽象的な論理により物事を把握する力と感性による洞察力とを併せもつことが必要と思います。人間と環境との必然的な関係性を見出す能力を身に付けるために、ひとりひとりが努力し続けることを願っています。

(むらまつもとやす)

山中新太郎 先生

((新)デザイン基礎, (新)建築設計Ⅰ)



シリンダーハウス



略歴

1992年 日本大学理工学部建築学科卒業
2001年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了
2000年 山中新太郎建築設計事務所設立

私は建築家に必要な能力のひとつに「最後まで物事をやり遂げる力」があると考えています。原広司さんは、大学時代に丹下健三さんから「建築は執念である」という言葉を送られたそうです。彼は大学院の講義の最後にそのエピソードを披露しながら、同じ言葉を学生たちに送っていました。独り善がりではなく確かな素養と説得力をもって、信じたテーマを「やりきる」。そんな意識をもって建築の課題に取り組んでもらえればと思います。

(やまなかしんたろう)

植木健一 先生

(短大・建築メディアデザイン演習Ⅰ,Ⅱ)



United Bamboo Store



略歴

1989年 京都大学工学部建築学科卒業
1989～2000年 空間研究所勤務
2002年 コロンビア大学建築学部大学院修士課程修了
2002年 nSTUDIO 設立

2001年から1年間、コロンビア大学に留学してきました。長らく携わった設計の実務に一区切りをいれ、本当に久しぶりに、建築を学ぶ一学生として教育の場に身を置いたわけです。これから建築はどう変わっていくのか、その変容に対して建築教育の場がどうコミットしていくのか、学ぶ側・教える側双方の視点から見極めたいと思っていました。そこで感じ取った変容への熱狂を、いま建築を学ぶ日本の学生に改めて伝えていきたいと考えています。大学は、まだ見ぬ新しいものを恐れることなく捉えようとする大いなる建築的冒険の場なのです。

(うえきけんいち)

大沢悟郎 先生

(短大・デザイン基礎, 建築設計 I)



薬師池の家



略歴

1974年 東京理科大学工学部建築学科卒業
1975～84年 MIDI 総合設計研究所
1984年 TOS 計画工房設立

何ごとにも好奇心をもってください。あらゆる世界に興味をもつことは、自分自身のこれからの生き方にも豊かさを与えてくれます。自分以外の人間の違った考え方や興味にふれることも大事です。本や授業での知識を確かめる行動、たとえば旅に出たり、展覧会を見るなど身体を大いに動かすことも大事。友達を巻き込んで出かけてください。建築設計の課題の発想は、このような経験や好奇心の引き出しから取り出すことから始まります。

(おおさわごろう)

森田信幸 先生

(短大・デザイン基礎, 建築設計 I)



光と緑あふれる家



略歴

1972年 日本大学生産工学部建築工学科卒業
1975年 ミシガン州立大学大学院都市計画学科修士課程修了
1975～80年 ZEN 設計勤務
1980年 森田総合計画（現ワークス一級建築士事務所）設立

皆さんは、スポーツ観戦や映画、絵画、音楽鑑賞などで感情の高まりや、心が揺さぶられるような感動を経験したことがあると思います。それでは、建築空間を体験して感動した経験はどうでしょうか？ 建築空間における感動体験を希望する学生諸君には、国内外での建築行脚をお薦めします。自分の感性にびったりくるような建築、今まで予想だにしなかった建築との出会いを探し求める旅に出るのです。幾多の建築家も旅行中に会った人々や、建築、環境に影響を受け、その建築家の一生を左右するようなインスピレーションの啓示を受けています。

(もりたのぶゆき)

横村隆子 先生

(短大・デザイン基礎, 建築設計 I)



下町の家



略歴

1977年 日本大学理工学部建築学科卒業
1977～80年 黒沢隆研究室
1980～82年 板垣元彬建築設計
1982～88年 水澤工務店設計部
1991～96年 UG 都市建築
1996年～ 横村隆子 YHT 環境設計設立

建築をはじめ、ものを作るということは、個人が発想し表現する行為です。さまざまな条件、社会や自分と、しっかり向き合い考え判断し、自分の考えを表現していくことは楽しいことです。そのプロセスでは、時に辛いこともあります。かたちになった時の達成感嬉しいものです。そんな喜びをたくさん体験してほしいと思います。

また授業では、理論や技術と共に、設計者の内面にあるもの作りの心とか、面白さとかプラスアルファなことも積極的に吸いとろうとしてほしいと思います。

(よこむらたかこ)

『建築はほほえむ』を読んで

飯田善彦

学生の本離れが言われ始めて久しい。大学で教えながら受ける印象もその通りであるし、この傾向はますます大きくなっているように思う。加えて最近では何かを調べることすら、インターネットからの情報に安易に頼っている。それが目に余るせいかどうか、最近建築学会が発行する「建築雑誌」と、どちらかというところと正反対にあるサブカルチャー系の「Casa Brutus」が、相次いで建築を学び始めた学生たちや建築入門のための「本」の特集をしている。取り上げ方も内容もそれぞれの特徴がでていて面白い。

ちょうどそんなタイミングで、松山巖さんが『建築はほほえむ』（西田書店）という新刊を送ってくれた。新書版の大きさで、ちょっとザラッとした軽めの紙に印刷されたかわいらしい本であるが、帯には「建築を考えれば世界はみつかる」といういかにも松山さんらしい鋭く、深いキャッチコピーが一行。松山さんが正面きって建築の本を何故という興味もあって、その日現場への行き帰りの電車の中で一気に読んでしまった。あと書きに、「…この本は高校生たちに、大学ではじめて建築を学ぶ人たちに向けて書いた…」とあり、何となく腑に落ちると同時に、その直前の「建築は人間の生活そのものであり、自然とともにつくる風景であり、人と人が共に生きる関係である。いま多くの人に建築について考えてほしい。」という文章を読んで、それほど危機感を感じるほど、今の建築を取り巻く状況がひどいことを改めて示唆された思いがした。

著者の松山巖さんは、東京芸大建築科に在学中、元倉真琴さん、井出健さんと共に「コンペイトー」というグループを作り、非常にユニークな視点で都市を観察し、

筆者略歴

1950年 埼玉県浦和市生まれ
1973年 横浜国立大学工学部建築学科卒業
1986年 飯田善彦建築工房設立



その分析や評価を「都市住宅」誌上に発表していた人である。ヴェンチュリやアレキサンダーなど近代合理主義に対抗するさまざまな思想的実践の試みと相まって、当時学生だった僕たちは彼らの都市へのアプローチに大変刺激を受けた。資本の論理によって破壊され再編が進む高度成長期にあって、市民が生活する街というフィールドを、一見どんなにひどい風景であっても時間や歴史が持続する資産として見直し、その中に多様な魅力を再発見していくような見方はとても新鮮だった。

その後松山さんは、文筆活動に重心を移してゆくが、「乱歩と東京」、「群衆」をはじめ、松山さんならではの手法で時代を切り取ってゆく著作群は、平易でありながら想像力を喚起する魅力的な文体と相まって、とても評価が高い。一貫してブレない「コンペイトー」時代から引き継がれている視点、丹念にディテールを拾いながら構築されていく全体像はとても建築的であり、読み進めながら受ける印象は紛れもなく優れた建築を経験するときを感じる喜びに近いものがある。最近では「建築雑誌」の裏表紙に24回連載された「そして私たちは再び地図を描く」というエッセイが出色だった。

『建築はほほえむ』も同様に、とても読みやすい文章の中に鋭い警句が散りばめられている。建築とは何なのか。建築家とは何をすべき人間なのか。大きなものへの疑い、小さなものへの共感。そこには全く変わることのない松山さんの思想が溢れている。学生のみならず、さまざまに思い悩みながら実際に建築を設計している人たちにも是非読んでもらいたい一冊である。

(いっだよしひこ・非常勤講師)

名古屋大学
野依センター
(左) 実験棟
(右) 交流棟



松山 巖 著
『建築はほほえむ』
(西田書店刊)



参加のデザイン

嶋田幸男

筆者略歴

1948年 東京都生まれ
1972年 日本大学理工学部建築学科卒業
U研究室入室
1985年 七月工房設立



僕が卒業した1972年当時は、改革の嵐の余韻がまだ残っていて、何となくけだるい雰囲気が漂っていた。

僕もこれから一体どうしようという感じだった。

当時は「都市住宅」や「建築」というインパクトの強い雑誌が健在で、アーキグラムの挑発的なプロジェクトや「ペルー低所得者向き集合住宅国際指名コンペ」のアレグサンダー案などに心を動かされていた。そんな時、吉阪隆正の特集が雑誌「建築」であり、「大学セミナーハウス」や「アテネフランセ」、その他の計画案に興味をそそられた。「席が確保できれば来てみなさい」と言われて吉阪氏の事務所（U研究室）にとにかく通うことになった。

事務所にあふれるスタディモケイは油土やスタイロフォームやダンボール製で、常に手が加えられていてそのかたちを変え、スケッチは例えばカレンダーの裏紙に描かれたりして、黒々とした線ははみ出しそうな勢いがある。

そこには「モダン」とは対局の、ある種の始源的な勢いのようなものを感じ、吉阪も「これからはアジアです」と常々言っていて、停滞していた当時の状況を切り拓く可能性を感じたりしていた。

そのU研では、あるプロジェクトが始まるとベテランも新入りもすべてのメンバーが案を出し合うことになっていて、部分でも全体でも、とにかくスケッチやモケイで意思表示をする全員参加のルールがあった。

皆のイメージやおもいがモザイクのようにちりばめ

られていて、決して一人の個性ではつukらないという合意形成のデザインプロセスは、自身の事務所をつくってじきに始まった石打のまちづくりや農村歌舞伎舞台の設計、世田谷区奥沢の「ねこじゃらし公園」の設計などにうけつがれていった。

皆の輪はそこを使う人や地域の人々に広がり、ワークショップを重ねることで幅広い視点や思いがけない発見、またさまざまな人たちとの出会いを可能にした。

維持管理を優先させて受け身の空間をつくるのではなく、「こんなことをしたい」、「こんな場所がほしい」というごく日常的な発想を大切に、そのことの意味や問題点を皆で解きほぐしてゆくプロセスに多くの時間とエネルギーが注がれた。

そのことで、石打の歌舞伎舞台では演者である地元の人々が、パツパツと呼ばれる重い建具を倒して舞台をつくるという毎年くり返される重労働を引き受け、「ねこじゃらし公園」ではビオトープの水辺というデリケートな環境を地域の人々が守り育てるという意味や覚悟が合意され、現在その水辺は子供たちや虫やかえるたちにとって、宝物のような空間に育っている。

「参加のデザイン」は私たち建築家にとって、とても魅力的ではあるけれど、ややもすると形式化された免罪符におちいりがちである。そのことに自戒をこめて、試行錯誤をくり返しながら、新しい空間の可能性をさぐってゆきたいと思っている。

(しまださちお・非常勤講師)



ねこじゃらし公園の水辺



ねこじゃらし公園ワークショップ



石打農村歌舞伎舞台 演者は地域の人々

平成15年度 建築学科就職状況

建築学科就職事務室

◆就職状況を振り返って

昨年度就職状況の報告をこうして書いていても、実はもう来年度卒業の人たちの求人の山は過ぎてしまっていて妙な気分です。学生にしてみれば、建築の幅広い輪郭がようやく見えてきた3年生の終わり頃、正月明けには早くも就職という岐路の選択が迫られます。その時期が入学から3年も経ないでやって来るわけで、春休みもノンビリしてられません。ここ数年、求人数は3月を頂点にして、新学期が始まる以前に既に約50%の求人が出揃い、5月中には70%にもなります。大手企業は、まだ学期末試験が終わるかどうかという頃に面接や現場見学会を催して内定の絞り込みを始め、新学期前どころか卒業式前には、その1年後卒業の人たちを対象とした就職戦線は一区切り付いてしまっているという状況です。この現実をむしろ1・2年生にこそ意識してもらい、そこに立ち向かっていく準備を進めていく必要があるということです。

3年連続で減少していた建設業

許可業者数が、昨年度末は増に転じたということが、先頃国土交通省より発表されたとはいえ、建設市場の縮小傾向はとどまる様子がありません。景気の先行きが見えにくい経済の成り行きから、企業側は厳しい採用計画のもとに人数を絞っており、優秀な人材を求めて他社より少しでも早く動き出す傾向が極めてハッキリしています。また、教室推薦などによらず、自由応募で採用する割合も高まっています。大学院進学者(留学希望者なども含む)も昨年度は一気に120名の大台を突破し、4年生の1/3が大学院などに進学していることとなります。その数は、3年前に比べ1.6倍以上に達しています。

こうしてみると、世相を反映して、より実際的な能力を求める企業側の採用条件と、今まで以上に自分自身の専門性を高めることで差別化を図ろうとする学生側の意識が両面で現れていると受け止められます。企業側は即戦力を求める傾向があり、新卒者だけに絞って採用するのではなく、経験者を募集したり、年度の変

わり目や時期に関係なく人材を募集するといった幅広い求人・採用が見られるようです。本学建築学科は、層の厚い先輩たちのおかげで、幸い良好なレベルを保っていますが安心はできません。

就職の窓口となってくれる諸先輩や諸企業の人たちと話して感じていることは、何も特別なことではないということです。基礎的な知識と技術を身につけ、物事に対して積極的に取り組む姿勢がどの程度のものであるのかがどの企業でも問われています。つまるところ、向上心と協調性を有し、コミュニケーション能力に富んだ人を望んでいることには変わりありません。しかし、本学の学生

表-2 月別求人件数

	平成15年度	平成14年度
12月	20	0
1月	32	39
2月	102	69
3月	268	164
4月	115	117
5月	78	87
6月	69	26
7月	75	26
8月	40	13
9月	16	8
10月	29	4
11月	33	0
12月	0	2
1月	0	3
2月	0	1
合計	877	559

表-1 就職状況の概要

注：()内は女子内数

	平成15年度			平成14年度		
	学部	大学院		学部	大学院	
		建築	不動産		建築	不動産
就職希望者数	221(60)	65(17)	4	193(57)	60(12)	6
就職内定者数	189(44)	51(12)	4	152(41)	36(7)	4
大学院進学者数(留学希望・その他含)	122(29)	4(1)	1	84(12)	7(2)	2(1)
就職・進学者数	311(73)	55(13)	5	236(53)	43(9)	6(1)
求人会社数	877			559		

はどちらかという大人しく、目標に向かう強さがやや不足しているようです。他者とのコミュニケーションの中から、独り善がりでない自己の主張と可能性を発見していく力、普段からの一步一步の積み重ねの中で意識的にそれを養っていく必要があります。自分が得意とするもの、興味あることに対して、失敗を恐れず挑戦的に取り組むこと。その一つ一つが次第に自信となっていくことでしょう。毎日を大切に研鑽する君を社会は期待して待っているのです。

(平成 15 年度就職担当・本杉省三)

◆概況

平成 15 年度の就職希望者は 290 名、就職内定者は 244 名で、希望者に対する内定率は約 84% となります。依然として続く経済不況の中、本年度は就職希望者の積極的な活動もあって、昨年度と比較すると内定率は増加しています(表-1)。また、進学者数(留学希望者なども含む)も昨年度より増加し(93 名→127

名)、自分自身の専門能力の向上を図ろうとする学生が多いこともうかがえます。

◆求人会社の状況

平成 14 年度と比較して、平成 15 年度は求人会社数に関しては増加(559 社→877 社)し、平成 13 年度並みの求人数となりました。求人会社数の増加の主な内容は、建設(137 社→214 社)、建材・エンジニアリング(37 社→129 社)が目立ちます。

建築学科の求人申し込みは、就職協定廃止で早期化し、ここ数年 3 月に集中しています(表-2)。特に住宅産業は早期化傾向が強く、平成 15 年度は 12 月より求人申し込みがありました。この傾向は今後も見られることが十分予想されますので、就職希望学生は積極的な情報収集と採用試験に対する早期準備が必要です。

◆就職内定者の内訳

平成 15 年度は平成 14 年度、平成 13 年度と比較すると、就職希望

者数に対して内定者数は増加しています。内定者数の傾向は、設計事務所・インテリア(9.7%→11.5%)が増加しましたが、建設業(16.1%→12.0%)と住宅産業(26.2%→23.2%)が減少しています。減少傾向とはいえ、平成 14 年度と同様、住宅産業は進学者を除く内定者の内訳では 35.4% に達し、建設業内定者(18.3%)など他業種と比較しても大きな割合を占めています。しかしここ近年、住宅産業は技術職採用にもかかわらず営業に携わることが多く、自身の適職ではないと入社後早々に判断して転職する卒業生が目立ちます。企業の採用活動早期化を背景に、学生がいささか勇み足で就職活動を進め、浮き足立って就職先を決定してしまうことが大きな原因の一つと考えられます。自身の適性・適職について熟慮した上で、自分の就職先を決定する必要があるのではないのでしょうか。

(平成 15 年度就職事務担当・

矢萩有美子)

表-3 求人・内定者の内訳

	求人会社数				内定者数								内定者数割合
	大企業	中企業	小企業	計	大企業		中企業		小企業		計		
					学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
A 建設業	54	89	71	214	19	6	14(2)		5(1)		38(3)	6	12.0
B 住宅・不動産	25	57	47	129	40(5)	3(1)	20(5)	5	17(4)		77(14)	8(1)	23.2
C 設備	29	34	22	85	4(2)		2	1(1)	3	3(1)	9(2)	4(2)	3.6
D 設計事務所・インテリア	13	30	81	124	4	2(1)	7(4)	5(1)	14(5)	10(3)	25(9)	17(5)	11.5
E 建材・エンジニアリング	26	72	22	120	10(5)	1	2(1)	2(1)	2(2)		14(8)	3(1)	4.6
F コンピュータ・情報	11	11	4	26	6	1	2(1)			1	8(1)	2	2.7
G 製造業・営繕・その他	59	51	11	121	5(4)	2(1)	3	1	1	2(1)	9(4)	5(2)	3.8
小計	217	344	258	819	88(16)	15(3)	50(13)	14(3)	42(12)	16(5)	180(41)	45(11)	61.5
H 官公庁・大学				28							5(2)	5(1)	2.7
法人				30							1	1	0.5
I 進学 (大学院・研究生・留学・その他)											122(29)	4(1)	34.4
J 自営業											3(1)	0	0.8
総計				877							311(73)	55(13)	100.0
											366(86)		

以下の統計は学部、大学院建築学専攻に関するものである。

注：大企業…従業員 500 名以上、中企業…従業員 100 名以上、小企業…99 名以下、()内は女子内数、求人会社数…再募集は除く。

表-4 A 就職先の内訳 (建設)

注: (株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
竹中工務店	1								1	0	ユニオン建設								1		1	0
清水建設	1								1	0	若築建設								1		1	0
鹿島建設	2	1	1						3	1	新日本建設								4(1)		4(1)	0
大成建設	2								2	0	日本建設		1						1		2	0
大林組		1							0	1	東武谷内田建設		1								1	0
戸田建設	1								1	0	山田建設								1		1	0
西松建設	2								2	0	三浦工務店		2								2	0
前田建設工業		1							0	1	土屋組								1		1	0
奥村組								1	1	0	伊藤建設								1(1)		1(1)	0
東急建設								1	1	0	新昭和								1		1	0
飛鳥建設								1	1	0	アベルコ								1		1	0
五洋建設								1	1	0	八光建設								1(1)		1(1)	0
鉄建建設			1						1	0	サンユー建設								1		1	0
浅沼組								1	0	1	ラクシー							1		1	0	
小田急建設								1	2	1	アサヒ							1		1	0	
ダイア建設	1								1	0	植敏						1				1	0
総計	10	3	6	0	1	0	21(3)	3	38(3)	6												

表-4 B 就職先の内訳 (住宅・不動産)

注: (株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
積水ハウス			1				8(2)		9(2)	0	セキスイハイム神奈川								1		1	0
旭化成ホームズ							3		3	0	セキスイハイム千葉								2		2	0
大和ハウス工業							5		5	0	東管								1	1	1	1
三井ホーム							2	1	2	1	パナホーム北関東								1	1	1	1
パナホーム							2	1	2	1	ミサワホーム西関東								1		1	0
積水化学工業								1(1)	0	1(1)	セントラル総合開発									1	0	1
大東建託							1		1	0	サイサンミサワホーム								1		1	0
扶桑レクセル							2		2	0	ホームイング								1		1	0
富士ハウス							1		1	0	エフ・ジャー・ネクスト								1		1	0
三井不動産ビルマネジメント							1(1)		1(1)	0	有楽土地								1		1	0
三井物産ビルマネジメント							1(1)		1(1)	0	アーネストワン								1		1	0
スターツ							1		1	0	アルテカ								1(1)		1(1)	0
東新住建							2		2	0	九州八重洲工業								1		1	0
東急コミュニティー							1		1	0	Century21 日立ホーム								2		2	0
ミサワホーム東京							1		1	0	旭化成住宅建設 北関東								1		1	0
野村ビルマネジメント							1		1	0	トヨタホーム東海								1		1	0
中央住宅							3		3	0	武蔵トヨタホーム								1		1	0
みずほアセット住宅販売							1(1)		1(1)	0	ユニオン建材ビルダー						1				1	0
Century21 スミカ							1		1	0	シーズクリエイト								1		1	0
朝日ビルマネジメント							1		1	0	フージャースコーポレーション								1		1	0
三井物産ハウステクノ								1	0	1	第一住創								1(1)		1(1)	0
三洋ホームズ							1		1	0	ビックヴァン								1		1	0
東急ホーム							1		1	0	兼六ホーム								1		1	0
アイフルホームテクノロジー							1(1)		1(1)	0	サンフロンティア不動産								1		1	0
スターツホーム							1(1)		1(1)	0	オープンハウス								1(1)		1(1)	0
スターツアメニティ							1		1	0	東京組								1		1	0
東栄住宅							1		1	0	日本プロパター								1(1)		1(1)	0
エム・シー・コーポレーション							2(2)		2(2)	0	プロス住宅								1(1)		1(1)	0
興和不動産							1		0	1	リアルウッド								1		1	0
総計	0	0	1	0	1	0	75(14)	8(1)	77(14)	8(1)												

表-4C 就職先の内訳〈設備〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
タカラスタンダード							1(1)		1(1)	0	千代田テクノエース								1	0	1
ジョンソンコントロールズ							1(1)		1(1)	0	ヤマト								1	1	0
新菱冷熱工業							1		1	0	アコーステックエンジニアリング								1	0	1
太平エンジニアリング							1		1	0	ダイケンエンジニアリング								1	1	0
日本板硝子環境アメニティ			1						1	0	陽和公営						1			1	0
オーク設備設計									0	1(1)	環境調査事務所		1							1	0
若林音響									0	1(1)										1	0
総計											0	0	2	2(2)	1	0	6(2)	2	9(2)	4(2)	

表-4D 就職先の内訳〈設計事務所・インテリア・コンサルタント〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
日本設計							1	0	1	イクス・アーク都市設計									1	0	1
佐藤総合計画				1				0	1	三輪設計事務所									1	0	1
NTT ファシリテイズ			1					1	0	グローバルプロデュース									1(1)	0	1(1)
桂設計							1(1)	0	1(1)	サダリ構造設計室									1(1)	0	1(1)
石本建築設計事務所							1	0	1	野口都市研究所									1	0	1
山本理顕設計工場							1	0	1	アサカ設計事務所									1	0	1
梅沢建築構造研究所							1	0	1	東宝舞台								1	1	0	
日本 E. R. I							1(1)	0	1(1)	長谷建築設計事務所								2	2	0	
乃村工藝社							1	1	0	構研設計		1							1	0	
丹青社				1			1	2	0	細貝建築事務所									1	1	0
池下設計							1(1)	0	1(1)	アトラス設計									1	1	0
IAO 竹田設計							2	0	2	セット設計事務所								1(1)	1(1)	0	
中川龍吾建築設計事務所					1(1)			1(1)	0	千都建築設計事務所									1	1	0
東京セキスイファミレス							1	1	0	プラネットワークス									1	1	0
デザインアートセンター							1(1)	1(1)	0	エム・ワン									1	1	0
A FACTORY			1(1)					1(1)	0	リラインス									1	1	0
アデイスミュージズ							2(2)	2(2)	0	Takayama						1(1)				1(1)	0
間瀬コンサルタント							1	1	0	シブロス								1(1)	1(1)	0	
エスバス建築事務所		1						0	1	あずか設計						1(1)				1(1)	0
総計										0	1	3(1)	1	4(3)	0	18(5)	15(5)	25(9)	17(5)		

表-4E 就職先の内訳〈建材・エンジニアリング〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
新日軽							1		1	0	大建工業								1		1	0
YKK ap							1(1)		1(1)	0	川商ジェコス								1(1)		1(1)	0
トステム							1(1)		1(1)	0	三井住商建材								1		1	0
不二サッシ							1		1	0	遠藤照明									1(1)	0	1(1)
ナイス					1		1(1)		2(1)	0	昭和フロント								1		0	1
立山アルミニウム工業								1	0	1	ヤマキ工業								1(1)		1(1)	0
吉野石膏							1		1	0	昭栄コンクリート工業								1(1)		1(1)	0
三協アルミニウム工業							1(1)		1(1)	0	トニー			1(1)						1(1)	0	
総計											0	0	1(1)	0	1	0	12(7)	3(1)	14(8)	3(1)		

表-4F 就職先の内訳〈コンピュータ・情報〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
日立エイチ・ピー・エム							1		1	0	TIS								1	0	1	
東京コンピュータサービス							1		1	0	トランスコスモス								1		1	0
日本システムイノベーション							1		1	0	医療システムズ								1(1)		1(1)	0
T&D 情報システム							1		1	0	テクマトリックス								1		1	0
CSK							1		1	0	構造ソフト								1		0	1
総計											0	0	0	0	0	0	8(1)	2	8(1)	2		

表-4 G 就職先の内訳〈製造業・営繕・その他〉

注：欄は省略（ ）内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計			
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		
セコム							1(1)		1(1)	0	大興物産									1		1	0
フランスベッドメディアカレッジ							1(1)		1(1)	0	森ビル流通システム									1		1	0
コムスン							1(1)		1(1)	0	サントリーパブリシティサービス										1	0	1
エルメスジャパン							1(1)		1(1)	0	東京タカラ商会							1				1	0
電通テック							1		1	0	キャンノアイテック										1(1)	0	1(1)
大和工商リース						1(1)			0	1(1)	テー・オー・ダブリュー									1	0	1	
TOA								1	0	1	常州大織紡織品有限公司							1				1	0
総計												0	0	0	0	2	1(1)	7(4)	4(1)	9(4)	5(2)		

表-4 H 就職先の内訳〈官公庁・法人〉

注：欄は省略（ ）内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計			
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		
国土交通省関東地方整備局							1	0	1	日本大学理工学部建築学科副手				1(1)							0	1(1)	
福島県庁							1(1)		1(1)	0	日本大学理工学部研究科				1							0	1
三重県警							1		1	0	医療・福祉工学専攻副手									1		0	1
茅ヶ崎市役所							1		1	0	延辺大学理工学部										1	0	1
東松山市役所							1(1)		1(1)	0	明星学苑									1		1	0
日本大学理工学部建築学科副手				1					0	1	日本大学インノベーションセンター				1							0	1
											清水港木材産業協同組合									1		1	0
総計												0	0	0	4(1)	0	0	6(2)	2	6(2)	6(1)		

表-4 I 就職先の内訳〈進学〉

注：（ ）内は女子内数

	学部	大学院	計
日本大学大学院	73(15)		73(15)
筑波大学大学院	1(1)		1(1)
横浜国立大学大学院	1		1
千葉大学大学院	1		1
九州大学大学院	1		1
京都府立大学大学院	1(1)		1(1)
京都工芸繊維大学大学院	1(1)		1(1)
University of East London	1		1
福岡県立大学リハビリテーション学部	1(1)		1(1)
埼玉医療福祉専門学校	1		1
LEC東京リーガルマインド	1		1
留学希望	4(1)	1	5(1)
その他	35(9)	3(1)	38(10)
総計	122(29)	4(1)	126(30)

表-4 J 就職先の内訳〈自営業〉

注：（ ）内は女子内数

	学部	大学院	計
建設	1		1
設計事務所・インテリア	1(1)		1(1)
建材・エンジニアリング	1		1
総計	1(1)	0	3(1)

表-5 企業内定の応募方法

	学部	大学院	計	比率
教室推薦	10	4	14	6.2
研究室推薦	13	3	16	7.1
縁故推薦	10	1	11	4.9
自由応募	147	37	184	81.8
総計	180	45	225	100.0

注：官公庁、法人、大学院進学、自営業を除く

◆平成16年度就職活動終盤に向けて+翌年度就活に向けて

今年度の就職活動は、そろそろ終盤を迎えつつあります。求人9割ほどは6月までに集中し、就職希望者の過半は既に就職先を決定し、まだ決定していない人の何割かは内定先をもっている状況と考えられます。何社も内定をもらっている人がいる一方で、まだ内定が出ずに悩んでいる人もいます。このあたりで今までの就職活動を振り返って、失敗した原因を考えてみることも必要です。

企業の人事担当者の求める人物像にはある程度共通項があります。①専門知識・能力をもっている、②コミュニケーション能力がある、③積極性があり意欲的、④社会人としての常識・礼儀がある…などです。多くの企業は面接を重視し、面接からこのような点を判断します。理想的な学生像を演じるのではなく、建築に対する自分の興味や学生生活で取り組んだことなどについて生き活きと話せるか、あるいは挨拶がちゃんとできるか、といった単純な点が評価されます。もう一度自己分析をして、就職に対する考えを整理してみましょう。残念なことですが、OBのリクルーターから、本学部建築の学生は就職に対しての真剣さが欠けて

いるという厳しい指摘があります。

発想を転換して、就職先についての考え方を考えてみるのも手です。建築関連の業態は変革の途上です。ビジネスチャンスを探り大きく成長する企業・業態が出てくる一方で淘汰も予想されます。今人気のある企業が次代の優良企業とは限りません。成長企業が求人に来て誰も手を上げず、同じところに大勢が押しかけるという現状は残念です。関連・境界分野にも視野を広げ、あなたの可能性を実現できる1社を見つけてください。起業家を目指す人も多く出てほしいところです。

次年度に就職を希望する3年生諸君、上に書いたことは皆さんに読んでほしい内容です。夏休みは自己分析のよい機会です。また、興味をもつ分野について深く勉強したり、何かに取り組んで自己をアピールする話題を作り出す最後のチャンスです。就活に右往左往するのではなく、普段の学生生活を充実させることが良い結果を生みます。あとは的確に情報収集をして早めに行動することです。学科の就職ガイダンスや、学部の就職対策セミナーなどに積極的に参加し、良い成果をあげることを期待します。(根上彰生)

記憶に残る一冊 (その1)

出版業界では、携帯電話など新しいメディアを使った本の在り方を試行錯誤しています。そんな背景を振り返って、教員が学生時代などに読んだ本で、特に記憶に残っている一冊を身近なコメントで紹介し、学生の皆さんの参考にしてもらおうというものです。でも、期待とは裏腹に逆に時代を感じてしまうのかなと気になります。

■ 安達俊夫 教授

大崎順彦『地震と建築』(岩波新書)

本書は、地震のメカニズムとその性質を明らかにし建築物の地震被害と地盤の関係をわかりやすく解説している。

■ 井上勝夫 教授

L. Cremer, M. Heckl『Structure-Borne Sound (固体伝搬音)』(Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York)

本書は固体音問題を扱った世界的に著名なもので、私が固体音関係の研究に興味をもった代表的書であります。

■ 野村 歡 教授

S. ギーディオ『空間・時間・建築』(丸善)

さぼりがちな授業の遅れを取り戻そうと頑張って読破したこの本は、私に建築のおもしろさ楽しさを教えてくれた。特に第2巻の近代建築以降の記述は私の建築に対する興味を倍加させた。

■ 若色峰郎 教授

黒田正巳『透視画 歴史と科学と芸術』(美術出版社)

中世のヨーロッパで主に宗教画に用いられていた透視画は、後に透視図法として確立されるが、その経緯についての解説書。

■ 今村雅樹 助教授

『現代の建築と都市』(自由国民社)

数ある高価な建築本よりも、500ページにもおよぶカタログ雑誌的な本の作り方や、ヴィジュアルな構成、ペーパーボックス的なラフでありながらもちゃんと内容がある本の雰囲気的印象的でした。現在の学生に好まれているスタイルとしての「本」の原型かもしれませんね。

■ 宇於崎勝也 助教授

芦原義信『街並みの美学』(岩波書店)

わが国の建築・街並みの解析を「美(景観)」という視点から試みている。著者は建築家として文化勲章も受賞。

■ 岡田 章 助教授

山本学治『現代建築と技術』(彰国社)

わが国で最初に構造レビューのあり方を示したと評価される山本学治。構造設計や技術に対する氏のゆるぎない視座は、解析技術の進んだ現代でも強烈で新鮮である。

■ 渡辺富雄 専任講師

ポール・ゴールドバーガー [渡辺武信 訳]『摩天楼—アメリカの夢の尖塔—』(鹿島出版会)

著者はニューヨークタイムズのジャーナリスト。専門にかたよらず一般市民の目から見たアメリカのSkyscraperの通史。

■ 佐藤慎也 助手

磯崎 新『建築の解体』(美術出版社、現在は鹿島出版会)

初めて読んだ建築の本。これを読んで建築をやろうと思った。大学3年生のことだったが……。

■ 田嶋和樹 助手

吉田研介『建築家への道』(TOTO出版)

7人の建築家が自分の経歴を冷静に振り返っています。しかし、その言葉に情熱を感じずにはいられません。

■ 富田隆太 助手

山下充康『音響額—名画に探る音の不思議—』(建築技術)

誰もが一度は目にしたことがある世界的な名画を題材に、“音響学”の立場から解説している書である。

■ 山田雅一 助手

尾池和夫『日本地震列島』(朝日新聞社)

地震とは？ 予知は可能なのか？ 地震学の専門家が過去の地震を点検し、地域ごとの特性をわかりやすく解説している。

■ 森田吉晃 短大助教授

中岡義介『水辺のデザイン 水辺型生活空間の創造』(森北出版)

地域生活空間に関するテーマを中心に水辺空間のデザインおよび水辺修景論が示されており、構造物や水辺の整備工事を極力抑制し、空間・生活的広がりをもった「水辺型生活空間」を創造することで水辺をデザインする手法が、今後の都市の再開発計画に参考になると思います。

■ 田所辰之助 短大専任講師

ケヴィン・リンチ [丹下健三・富田玲子 訳]『都市のイメージ』(岩波書店)

建築や都市を「つくる」ことだけでなく、「読み取る」ことにも構想力が必要なことを教えられた一冊。心象として立ち現われる、非計量的な、空間図式としての都市の姿。

■ 星 和磨 短大副手

谷川彰英『東京・江戸 地名の由来を歩く』(KKベストセ

ラース)

建築や建物を見学するときにその地域のもつ歴史を知りたいと思うことはありませんか。この本はそんな探求心をくすぐる一冊です。

■羽入敏樹短大専任講師は、関口克明教授と連名で、京都で開催された国際音響学会議(ICA2004)にて、「Relationship between Sound Image and Spatial Impression of Sound Fields in Concert Halls」「A New Algorithm for Directional Microphone System based on Spatial Deconvolution」の2編を発表した。

■羽入敏樹短大専任講師は、関口克明教授、星和磨短大副手と連名で、淡路島で開催された室内音響に関する国際シンポジウム「International Symposium on Room Acoustics: Science and Design 2004」にて、「Relationship between Sound Image and Listener Envelopment of Sound Fields in Concert Halls」を発表した。また、星和磨短大副手は、関口克明教授、羽入敏樹短大専任講師と連名で、「Loudspeaker Arrangement for Multichannel Sound Reproduction taking into Consideration Listener Envelopment」を発表した。

■小嶋勝衛教授、根上彰生教授、宇崎崎勝也助教授、吉田充則氏(不動産科学専攻修了、現住友信託銀行)連名の原著論文「東京都千代田区における住宅付置制度の効果と運用方策に関する研究」が、日本建築学会計画系論文集No. 578(2004年4月号)に掲載された。

■中島肇氏、斎藤公男教授、黒木二三夫助教授、岡田章助教授連名の原著論文「膜材料の応力カーブひずみ曲線のモデ

教室ぶろむなード

ル化に関する研究 張力膜構造の応力弛緩に関する基礎的研究(その1)」が、日本建築学会構造系論文集No. 579(2004年5月号)に掲載された。

■6月8日~26日、「NU建築展」がCSTギャラリー15A~Cにて開催された。3つのブースに「手づくりドーム」習志野ドームなどで製作されてきた手づくりドーム作品の紹介、「AD」建築家によって卒業制作や修士設計から選ばれるAD賞受賞作品の紹介、「小

さな家」佐藤光彦氏設計による住宅の敷地を課題とした小住宅作品の紹介と、バラエティーに富んだ展示が行われた。また、1号館屋上テラスにも、手づくりドームの実物が展示され、普段は上がることのできない屋上が開放された。また、6月18日に「第21回NU建築フォーラム」が、パネラーに建築家の椎名英三氏、佐藤光彦非常勤講師、山中新太郎非常勤講師、モデレーターに中谷正人氏を迎え、CSTホールにて開催された。「住宅は個的なものか」というテーマで、前半は各パネラー設計による住宅作品の提示、後半は4氏のパネル・ディスカッションが行われた。



CSTギャラリー



1号館屋上テラス



パネル・ディスカッション



満員のCSTホール

● 駿建目次

(2004.7 Vol.32 No.2 通巻129号)
表紙「NU建築展」
展示企画・製作: 高宮研究室
撮影: 高宮研究室

世界は君を待っている	2	平成15年度 建築学科就職状況	14
新任非常勤講師紹介	7	記憶に残る一冊(その1)	19
私と建築	12	教室ぶろむなード	20

建築や都市を「つくる」ことだけでなく、「読み取る」ことにも構想力が必要なことを教えられた一冊。心象として立ち現われる、非計量的な、空間図式としての都市の姿。

■ 星 和磨 短大副手

谷川彰英『東京・江戸 地名の由来を歩く』(KKベストセ

ラース)

建築や建物を見学するときにその地域のもつ歴史を知りたいと思うことはありませんか。この本はそんな探求心をくすぐる一冊です。

■羽入敏樹短大専任講師は、関口克明教授と連名で、京都で開催された国際音響学会議(ICA2004)にて、「Relationship between Sound Image and Spatial Impression of Sound Fields in Concert Halls」「A New Algorithm for Directional Microphone System based on Spatial Deconvolution」の2編を発表した。

■羽入敏樹短大専任講師は、関口克明教授、星和磨短大副手と連名で、淡路島で開催された室内音響に関する国際シンポジウム「International Symposium on Room Acoustics: Science and Design 2004」にて、「Relationship between Sound Image and Listener Envelopment of Sound Fields in Concert Halls」を発表した。また、星和磨短大副手は、関口克明教授、羽入敏樹短大専任講師と連名で、「Loudspeaker Arrangement for Multichannel Sound Reproduction taking into Consideration Listener Envelopment」を発表した。

■小嶋勝衛教授、根上彰生教授、宇崎崎勝也助教授、吉田充則氏(不動産科学専攻修了、現住友信託銀行)連名の原著論文「東京都千代田区における住宅付置制度の効果と運用方策に関する研究」が、日本建築学会計画系論文集No. 578(2004年4月号)に掲載された。

■中島肇氏、斎藤公男教授、黒木二三夫助教授、岡田章助教授連名の原著論文「膜材料の応力カーブひずみ曲線のモデ

教室ぶろむな一ど

ル化に関する研究 張力膜構造の応力弛緩に関する基礎的研究(その1)」が、日本建築学会構造系論文集No. 579(2004年5月号)に掲載された。

■6月8日~26日、「NU建築展」がCSTギャラリー15A~Cにて開催された。3つのブースに「手づくりドーム」習志野ドームなどで製作されてきた手づくりドーム作品の紹介、「AD」建築家によって卒業制作や修士設計から選ばれるAD賞受賞作品の紹介、「小

さな家」佐藤光彦氏設計による住宅の敷地を課題とした小住宅作品の紹介と、バラエティーに富んだ展示が行われた。また、1号館屋上テラスにも、手づくりドームの実物が展示され、普段は上がることのできない屋上開放された。また、6月18日に「第21回NU建築フォーラム」が、パネラーに建築家の椎名英三氏、佐藤光彦非常勤講師、山中新太郎非常勤講師、モデレーターに中谷正人氏を迎え、CSTホールにて開催された。「住宅は個的なものか」というテーマで、前半は各パネラー設計による住宅作品の提示、後半は4氏のパネル・ディスカッションが行われた。



CSTギャラリー



1号館屋上テラス



パネル・ディスカッション



満員のCSTホール

● 駿建目次

(2004.7 Vol.32 No.2 通巻129号)
表紙「NU建築展」
展示企画・製作：高宮研究室
撮影：高宮研究室

世界は君を待っている	2	平成15年度 建築学科就職状況	14
新任非常勤講師紹介	7	記憶に残る一冊(その1)	19
私と建築	12	教室ぶろむな一ど	20